

学生たちと NPO 活動先の方々との出会いがもたらしたもの ーサービスラーニングを通してー

末盛 慶

本年度、私は教員として初めてサービスラーニングの科目を担当しました。以下、担当し終えての感想を述べたいと思います。

まずバスツアーで、多くの NPO の現状を見ることができました。この経験は今の自分にとっても確かな印象を残しています。なぜなら、NPO ごとにもっている特徴や匂い（具体的な匂いそのものではない）が違うことに驚くと同時に、興味を持ったからです。自分がずっと入っていける NPO や、ずっとその場に居たいと思う NPO に複数出会うことができました。この後、学生に対して NPO の活動を自分の知る範囲で伝えるようになりました。

私のクラスは、ほんわかと柔らかい雰囲気の学生が集まりました。おかげで私も楽しく 1 年間を過ごすことができました（ありがとう！）。前期に計画を練り、夏に企画を実施。後期はその活動の振り返りを行いました。1 月の授業最終回では、「各自がこのサービスラーニングで学んだこと、そしてこの経験を今後はどう活かしていくかを発表しよう！」と学生たちにリクエストしました。

学生たちは 1 人 1 人、丁寧に、率直に、そして素直にサービスラーニングでの振り返りを述べました。発表はできたことだけではなく、できなかったこともふれられていた。むしろ、できなかったことの悔しさや、そこから何を学んだのかを学生たちは率直に語った。

自分が立てた企画が思ったよりうまくできなかったこと。それで自分がへこんだこと。もっと事前にしっかり状況を見て計画を立てるべきだったこと。迷った点を活動先の人とうまく伝えられなかったこと。活動先の方からいろいろ厳しいことを言われたこと。しかし、今では本当に本当に活動先の方に感謝していること…。活動先の方に直接聞いて欲しいような話を、多くの学生が最終回の授業でしてくれました。

最終回の学生の発表は、4 月に出会った時とは何かが違って見えました。物事の受け止め方や人とのつながりの持ち方、捉え方の奥行きが増していることを感じ取ることができた。この意味で、サービスラーニングは学生にとって確かに成長の機会となっていました。

自分が生きた時代状況とも少し似ていますが、現在の若い人たちは以前よりもある意味守られながら、しかしその一方で不安の多い時代を生きています。こうした時代の中で、大学という枠から出て、活動先の方たちとじかに関わり、社会の手触りを実際の経験に伴って得ることは、社会とどう繋がり生きていくかという感覚を学生たちがつかむ上で大きな意味を持つと私は考えています¹。私は、活動先の方に、みなさんが思っている以上に学生は活動先の方との経験を胸にとめ、感謝していることをこの場をかりて伝えたいです。

このサービスラーニングは NPO の活動先の協力があって初めて成立するものです。今後さらに詰めていくべき部分、改善すべき点はあると思います。課題を改善しながら、今後とも、このサービスラーニングの活動のご協力いただきたいと思います。

最後に学生に向けて。自分の大学時代にはこうしたプログラムはなかったので、正直羨ましかったです。こうした経験ができたことを感謝し、ぜひ将来は今回自分たちがしてもらったことを自分たちができるように、君たちの次の世代に伝えていけるように、自分もそうした大人になれるように、向上心を持って日々頑張りたいと思います！

注1 社会学、青年心理学および発達研究の分野では、親でも先生でもない「第3の大人」との出会いが若者の成長にとって重要であるという理論や実証研究が多く存在しています。